

「暮らしと知識の統合的把握の試み ... その素描的な草案の控え」

渡部 重行

目次

1. はじめに
2. 暮らしと知識の基本型
 - 1) 端緒としての多辺田図式
 - 2) 暮らしのスキーマ、その基本型
 - ① 自然と集団
 - ② 親密圏と公共圏、そして地域
 - i) 親密圏 ii) 公共圏 iii) 親密圏と公共圏の関係 iv) 地域
 - ③ 世界（地球）と近代国家
 - 3) 知識のスキーマ
 - ① 身体と知識
 - ② 職人の技と経験知
 - ③ 経験知と身体的な知
 - ④ 経験的知識と伝聞的知識
3. 暮らしと知識の相関
 - 1) 暮らしと知識の接合図
 - 2) 内外の自然
 - ① 内外の自然、その意識以前のつながり
 - i) 身体と外なる自然 ii) 心と自然
 - ② 外界の認識
 - ③ 界面（インターフェイス）としての文化
 - i) 食物 ii) 分類 iii) 暮らしのあり方
 - 3) 親密圏と知識
 - ① 多様な人々との関係
 - ② 集団のなかで人になる
 - 4) 経験的知識と公共圏
 - ① 親密圏を超えた知識の共有
 - ② 自給的集団と外部
 - ③ 「職人」のネットワークと知識
 - ④ 「常識」(common sense/common knowledge)
 - 5) 世界（地球）と伝聞的な知識
4. いささか唐突な結語

1. はじめに

筆者はここ 30 年ほど、自然との関わりの中での「地域と暮らし」を主なテーマとして研究を進めてきた。そうした方向に舵を切ったのは、1990 年代に行なったナイジェリア調査で、発展途上というより崩壊途上にある社会、ほとんど毎年のように襲う異常気象などなどを目のあたりにして、そのような事態に至ったそもそもの原因を知りたいと思ったのがきっかけだった。それ以前はコスモロジーや象徴体系、民俗分類といった「知識人類学」的なテーマに関心があった。

そしてその両者、地域論的なテーマと知識論的なテーマを結びつける形で、統合的に把握することができないものか、という思いをずいぶん前から抱いていた。その思いの一端を、ここで稿にすることができたのは、喜びに耐えない⁰¹。

2. 暮らしと知識の基本型

1) 端緒としての多辺田図式

本稿に述べるあれこれのトピックを、より具体的な形で考えることが可能になったのは、多辺田政弘の著書の一枚の図が発端だったと思う。その図とはこのようなものであった【図 1】。

この図は、時間経過を含む大量の情報を一枚に凝集しているのので、少々わかりづらい。筆者なりに、時間経過を解きほぐしたのが次の図である【図 2】。

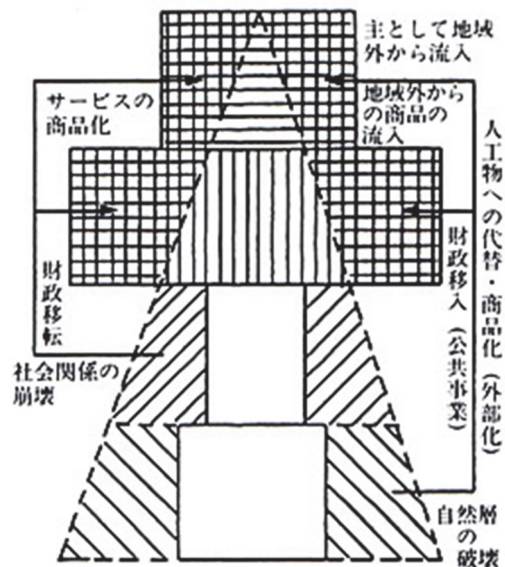
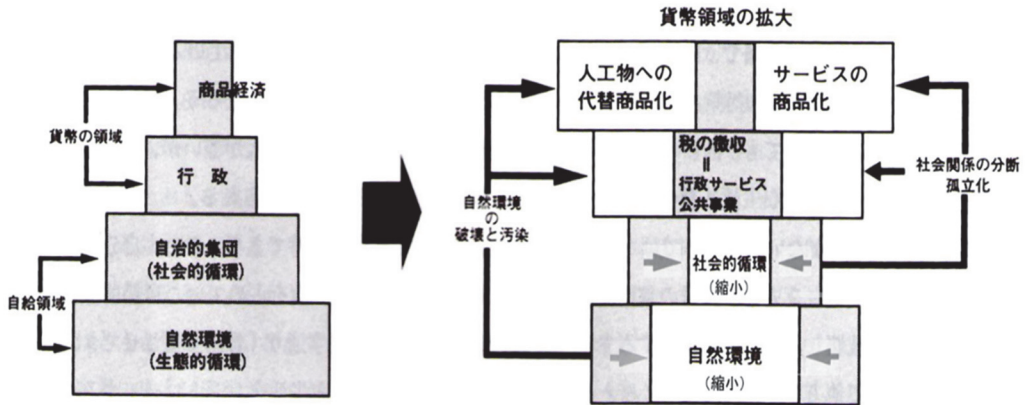


図 1】多辺田図式⁰²

⁰¹ 2017 年度 4 月から 1 年間、本学の「長期国内研究員」に採用され、長いあいだ温めてきた本稿の構想にようやく着手する機会を得た。ここに記して感謝する。

なお、タイトルについて一言。岡 正雄は筆者の母校（東京都立大学）で教鞭をとった人類学界の大先輩であった。彼の代表的論考の一つに「異人その他：古代経済史研究序説草案の控へ」という小論がある。きわめて大胆かつ刺激に満ちた論文であるが、最初に目にしたときは何よりもその表題に心を惹かれた。稚気あふれる遊び心は、まさに岡 正雄の面目躍如といったところか。いつかはこれを真似てみたいもの…と思っていたのだが、今回 70 歳をまえにして、その誘惑に抗うことができなかった。気分を害された方がもしあれば、伏してお詫び申しあげる。

⁰² 多辺田政弘 [1990:59]。



【図2】多辺田図式の展開⁰³

この図式の最も重要なポイントは、「社会」のあり方について明示的な形で「自然」を視野に入れて統合的な把握をめざしたこと、そしてその社会のあり方が近代化の過程においてどのように変容してきたかを、わかりやすく図示したことにある⁰⁴。ただ筆者の視点からすると、多辺田がそのライフワークとも言うべきテーマ「コモンズ（共有地）」を念頭に、その変化を示すべく作成したため、社会の描写がわかりづらくなってしまった。

多辺田は社会を「公／共／私」の3つの領域に分ける。そして「共（コモンズ）」の領域が、近代化のプロセスのなかでいかにして解体され、「私（私企業）」と「公（行政）」の二つの領域に吸収されていったかを論じた。彼の図もそうした主張に基づいて作成されたわけだが、図をそれ自体としてながめたとき、自然がまず土台にあって、その上に共同体的な集団がくるというのは、わかりやすいし納得できる。

しかしその上のレベルに「公（行政）」が位置し、そのさらに上に「私（私企業）」がくるという配置は、少々わかりづらい。また人類史全体を視野に入れたとき、近代国家や多国籍企業は、近代の世界にしか存在しない。近代的な国家や企業をもたない時代や社会では両者の位置に何をもってきたらいいのか。

もちろん多辺田にとって、そうした指摘はほとんど難癖にちかい。ただ筆者としては、人類の集団をもう少し一般的な形で捉えて「暮らし」を把握したいと考えるが故に、不満を感じるのである。そして、その不満が本稿の出発点になる⁰⁵。

⁰³ この図は、本稿の図式との関連を考慮して、三角形から階段状に形を変えたが、図の根本的な構成に変化はない。

⁰⁴ 経済学が自然をどのように捉えてきたのか、あるいは無視してきたかについては、中村 修 [1995] を参照のこと。

⁰⁵ なお、三俣 学 [2014: 8] も、多辺田の「図式」を分解し補足した独自の図を作成しているが、彼の場合

多辺田の目標がコモンズが近代化のなかでいかに変容したかを提示することなら、筆者が望むのは人類社会の基本的なあり方を措定し、そこから近代世界のあり方を照らし出すこと、つまり多辺田とは逆の方向性になる。また近代の世界が著しく経済を偏重する傾向があるのに応じて、多辺田の図式も経済の比重が大きくなっていった。筆者はこれを、「暮らし」一般を扱えるような形に、いましし拡張したいと考えたのである。

2) 暮らしのスキーマ、その基本型

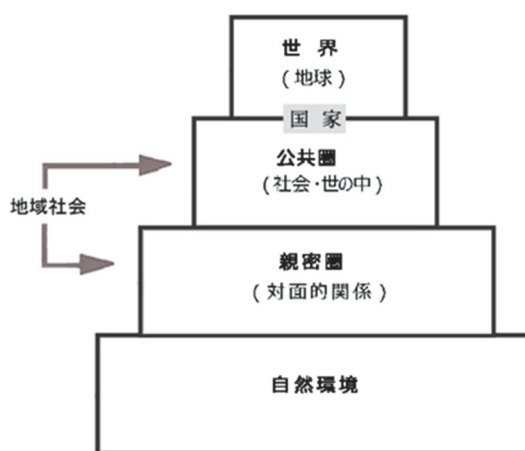
現在、世界には 6000 を超える民族がいるとされる。その多様な社会や暮らしの在り方に共通するようなスキーマ（図式）を設定するには、かなり抽象度をあげる必要がある。すでに別稿で論じたとおり、筆者は、人類史全体からみると、近代の世界は少数派かつ特異な存在だと考えている〔渡部重行 1995〕。そこで本稿では人類社会の「基本型」と「近代の世界」という対比を用いたい。まずは、人類社会の大多数を含む「基本型」について述べていく。

① 自然と集団

ここではまず暮らしについてのスキーマ（図式）を提示し、次いでそれについて説明するという形をとりたい【図 3】。見てのとおりスキーマは多辺田のそれと同じく 4 つの層からなる。下から順に「自然」「親密圏」「公共圏」「世界（地球）」となる。中間の二層、親密圏と公共圏を合わせて「地域社会」とする。

では順次説明していく。多辺田が示した二点、(1) 人類集団は、周囲の「自然」から必要なものを得る。そしてその際には (2) 親密な関係をもつ成員が互いに協力する「集団」の存在が不可欠である、この二つの要件については、そのまま踏襲することが可能と考える。

問題は、実に多種多様な構成とサイズの人類の諸集団をどう捉えるかである。実在する多様な集団を精査し、類型化しようとするれば、收拾がつかなくなる可能性が高い。だからこそ多辺田は、自らの目的に沿



【図 3】 暮らしのスキーマ（基本型）

も「公／共／私」の三領域が「商品経済／非商品経済」との関連で、どう変化していったかを捉えることが主眼となっている。

う形で、「公・共・私」という枠組みを考えたのであろう。

そもそも、集団（群れ）を形成して互いに協力しあうのは、人類のみに限られたことではない。では、人類の集団の特徴とは何なのか。筆者は外に対して開かれ、それによって重層的な構造をもつことが可能になっているところにあると考える。たとえば、人類の集団の最小単位は家族的な集団であるが⁰⁶、それらが寄り集まってさらに大きな集団を形成し、その大きな集団が暮らしにおける協力や助け合いの単位となることがほとんどである。場合によっては、その上にさらに都市や国家といった、より大規模な集団を形成することもある。このように、小さなサイズから始まり、それが寄り集まってさらに大きなサイズの集団を形成する。これが幾重にも重なる可能性を秘めているのが、人類の集団の特徴というわけである⁰⁷。

② 親密圏と公共圏、そして地域

結果として、世界には多種多様な構成とサイズの人類集団があふれることになったわけだが、すでに述べたように、それらの具体的な集団を対象として分類を試みたりすることは泥沼にはまること必定である。そこで、より抽象度の高い「親密圏」と「公共圏」という二項をたててみることにした。

i) 親密圏

まず「親密圏」である。それは成員の「対面的関係」を前提とし、日常的な協力や助け合いの単位となるような関係性を意味する。そのサイズは人類の能力に応じて、自ずから限界があると考えられる。筆者はかつてアフリカ社会を比較するなかで、生活の場となる 200 人から 300 人の集団がどの社会にも存在することを見出し、これを「生活集団」と名づけた〔渡部重行 1981〕。親密圏については、そうした集団を念頭に置いている。

今考えたいのは、この集団のサイズが人類史のなかできわめて長期に渡って、かつほとんどの地域で維持されてきたのは何故なのかということだろう。建築家で都市計画にもたずさわった戸沼幸市によれば、人間関係は集団の規模に応じて質的に変化し、人数によって次のような制限を受けるといふ。まず、15 人から 20 人程度までが形式ばらない親密な関係の限界で、それを超えると役割分担や規則などが必要になる。次いで 200 人から 300 人までは相手の個性をふまえて継続的な対面関係を維持できる。そして 3000 人程度までが顔と名前を一致させて記憶できる人数の限界になる、というのである〔戸沼幸市 1980〕。戸沼が「相手の個性をふまえ

⁰⁶ 「家族的」と呼ぶのは、このレベルですでにさまざまな形態と規模の親族関係に基づく集団が存在し、いわゆる「核家族」を基本的な形として措定することはできないからである。

⁰⁷ 筆者は「重層的な構造(多レベル性)」を人類の文化の特徴と考えているが、その詳細は別稿に譲りたい。

て継続的な対面関係を維持できるサイズ」とした 200 人から 300 人という数字は、期せずして筆者の提唱する生活集団のサイズに一致する⁰⁸。

たとえば日本の自然村（大規模な統廃合の結果としての今日の行政村ではなく）を見てみよう。各戸 10 人から 20 人程度までの家族が 6 戸から 10 戸集まって、日常的な協力の単位である近隣組織（人数は 100 人前後）を形成する。これが親密圏の集団に相当する。そして、それが何組か集まって村になる。村の規模は概ね 1000 人程度に抑えられ、それを大きく超えると分割されるという [神代雄一郎編 1977]。日常の協働は 100 人程度の集団でおこなうが、万が一にそなえてより大きな集団を形成しておく——ということなのではないか。しかも、この村のサイズがおよそ 1000 人というのもなかなか意味が深い。戸沼によれば「顔と名前を一致させ記憶できる人数の限界が 3000 人程度まで」とのことだったが、村の総人口が 1000 人程度なら村人のすべてが互いに顔見知りであることができる。

ii) 公共圏

次に公共圏であるが、これは人々にとっての「社会関係の外縁」ということができよう。いわゆる「世の中」とか「世間」と呼ばれるようなものを念頭に置いている。具体例を挙げてみる。近江商人の言葉と伝えられている「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」の「世間」がそれにあたると考えていいだろう。売り手と買い手という対面的な関係だけでなく、それを取りまく関係の外縁を「世間」と捉えたとみることができよう。「世の中」や「人の世」、比較的新しいやや硬い言い方ではあるが「社会」といった語も、類似の言葉といえる。採集狩猟民の多くにみられる「見知らぬ人間であっても、困っているものを見たら助けろ」というルールも、そうした公共圏的な関係の意識のなかで成立するものと見ることができよう⁰⁹。

別の角度から見れば、親密圏では個別の人間が集団を形成するが、公共圏では抽象度が一段あがった「類としての人」が問題なると捉えることもできる。個体の集まりとしての群れはほかの動物にも見られるが、「類として」のレベル、公共圏の関係は人間のみのものといえる。この公共圏に属する言説として「人は～するもの」「人として～をしてならない／するのが当然」などが考えられるが、この「人」こそがまさに類としての人間をさし示している。

⁰⁸ ロビン・ダンバー [ダンバー 1998] は、人と類人猿の脳のサイズと集団のサイズの相関を調べ、人類の基礎集団のサイズは 150 人程度とした（いわゆる「ダンバー数」）。この程度のズレはさほど気にする必要はないと考える。いわゆる「遊び」の要素が組みこまれているのだと考える。必要最小限の人数で集団を形成すれば効率的ではあるかもしれないが、万が一の事態で対応できない可能性がでてくる。そこである程度のゆとりをもって、集団のサイズを大きめにしておくということである。

⁰⁹ ブッシュマン（サン）については、ヴァン・デル・ポスト [1952, 1958] を参照のこと。池澤夏樹 [1992] の「狩猟民の心」という章には、簡にして要を得た記述がある。また NHK 取材班の『ヒューマン』[2012] には、見知らぬ同士の助け合いや分かち合いが、人類のメンタリティの中に組み込まれていることを示す実験が複数紹介されていて興味深い。

そして人類の諸社会の基礎的な単位として、以上のような「親密圏」と「公共圏」を合わせたものとして「地域社会」を想定してみたい。

iii) 親密圏と公共圏の関係

では、親密圏と公共圏はどのような関係にあるのだろうか。いくつかの事例をあげながら考えてみたい。

親密圏と公共圏のゆるやかな連携

まず寺嶋秀明はアフリカ中央部の熱帯林に住む採集狩猟民ピグミーのバンドを調査し、「今ここの集団」と「はるかな集団」の二層構造が存在すると述べる¹⁰。人類集団の中でも最もシンプルな部類に属する社会についての研究であり、注目に値するであろう。ピグミーの暮らしの単位は数十人程度のサイズのバンドである。居住と日々の暮らしをともにする。まさに「親密圏」の集団といえる。寺嶋はこれを「今ここの集団」と名づける。なぜならバンドのメンバーは一定せず、かなり頻繁に入れ替わるからだ。出て行って2、3か月戻ってこないものも少なくないし、時には1年戻ってこない場合すらあるが、それでもメンバーから外されることはない。

なぜならバンドのメンバーは皆、個人的な知り合いのネットワークをもっており、その人々を訪ねて行ってしばしとどまるのはごく普通の行動だからである。そうした個人間のネットワークは総体として、バンドを包み込むさらに広い関係網を形成する。寺嶋はこれを「はるかな集団」と名づけた。

ピグミーの人々は集団への帰属感、受容の感覚を求める。親密な関係、受け入れられているという感覚は心地よいが、そこに軋轢や齟齬が生じたとき心地よさは息苦しさに、束縛に変化する。彼らはそんなとき、バンドを離れて他所に別の関係を求めていくのである。ピグミーのバンドはひんぱんに居住地を変える。この移動が集団間の出入りを容易にしているとみることできるだろう。

彼らはいわば公共圏のレベルにも関係網をつくり、それと親密圏のバンドとの境界をあいまいにしておくことで、必要に応じて両者の間を自由に往来すること可能にし、小集団内の軋轢を回避しているのだ。

集団的規制の自主的な受容…日本の集落

では定住的な集落で、集団間の出入りが容易でなければ、公共圏はどのような形をとるのだろうか。

¹⁰ 本文中のピグミーに関する以下の記述は寺嶋秀明 [2009] による。

一例として日本の村落を見てみたい。たとえば村の「入会（いりあい）地」のルール。入会地の産物はさまざまだが、それぞれについて取ってもいい期間や量、取り方などが詳細に定められている¹¹。それは、入会地を利用するすべての者が守ることを要請される決まり事であるという点で、成員間の相互的・水平的な約束事というよりも、いわば外部からの定言的な命令（～すべし）として発現する。

しかし他方、日本の村は一般にかなり民主的な性格をもつことでも知られている。有力者が我意を押しつけたり、恣意によって不平等が生じたりするなかで、弱小な家が不利な立場に追いやられ、最悪の場合はつぶれるといった事態は、最終的に村の弱体化につながるがゆえに何としても避けるべきことであった¹²。

村の重要事は寄り合いで決められ、そこでは全員の合意（受認）が原則となる¹³。そのような自治的な村においては「村の決まり」はたしかに各人の行動を規制するが、同時にメンバーのそれぞれが自主的に守ることを受け入れた「自分たちの規範」でもあるという二面性をもつと言えるのではないか。

親密圏と公共圏は逆立するか？¹⁴

では、人びとの意に反するような集団的な強制についてはどう考えたらいいのだろうか。集団内の一部の人びとが強制力を持ち、ほかの大多数のメンバーは望むか否かにかかわらず、受け入れざるを得ないといった状態。それは「強制する側／される側」への分断であり、まさに「権力の発生」といえるような事態であろう。しかしこのトピックは、試論としての本稿には大きすぎる課題であり、ここではひとまず棚上げにしておきたい¹⁵。いずれにしても、親密圏と公共圏の関係をさらに問うことは今後の重要な課題である。

¹¹ 山菜、筍、茸、薪・柴、刈敷や牛馬の餌・敷き草用の草など、食物から燃料、田畑の肥料、家畜の餌等々、じつに多岐にわたる [養父志乃夫 2016]。

¹² 村の費用の分担についても各戸均等に割り当てるのが原則だが、そのあとで病人がいる家や寡婦の家などは負担を軽くし、働き手が多い家、豊かな家については負担を重くするなどして、実質的な負担の平等化を図った [養父志乃夫 2016]。これもまた、弱者に配慮することによって、最終的には村の存続に資する措置といえるだろう。

¹³ 宮本常一 [1984] が描く村の寄り合いの様子は、臨場感にあふれて見事である。

¹⁴ 「逆立」という言葉はもちろん吉本隆明 [1968] を踏まえている。しかし筆者は親密圏と公共圏について、吉本の自己幻想と共同幻想のように鋭く対立するものとは考えていない。詳しくは本文にて。

¹⁵ きわめて大きなテーマではあるが、興味深いテーマでもある。機会があれば、ぜひ取り組んでみたいものである。このトピックについては、ジークリスト 『支配の発生』 [1975]、ピエール・クラストルの『国家に抗する社会』 [1989] やヒュー・プロディの『エデンの彼方』 [2003]、ジェームズ・スコット『ゾミア』 [2013]、などがすこぶる刺激的かつ示唆に富む。

地域

最初に「親密圏」と「公共圏」の二つを合わせて「地域社会」とすると述べたわけが、ここまでの説明で「二つを合わせる」ということが、「AとBを足して」というような単純な話ではないということはお察しいただけたと思う。公共圏とはいわば人間の関係性の外縁であり、たとえ現実の関係のほとんどが親密圏の集団内に収まっていたとしても、人びとの意識には常に関係の外縁（地平）としての公共圏が存在し、この両者が相まってはじめて人間の集団が成立する。そして、そこが暮らしの場となるのである。

④ 世界（地球）と近代国家

スキーマの最上位、「世界（地球）」について。実はこのレベルは、基本形ではほとんど必要がない。暮らしの大部分はこの下位の地域社会（公共圏まで）のレベルで完結しているからである。しかし、近代の暮らしの形を理解する上ではこのレベルが不可欠とみられるため、ここに指定しておく。こうして得られたのが「暮らしの基本形」の図、前掲（4ページ）の【図3】である。

ところで、今日の世界においては、国家がきわめて重要な位置をしめており、文化や言語を語る際にも国単位で論じる例が多々みられる。ところが本稿の基本項目のなかに国家はない。では近代の国家は、図式のどこに位置づけられるのか。筆者は、世界（地球）にぶら下げる形で位置づけたい【図3】。近代国家は近代以前の王国や帝国などと性格が大きく異なる。それはこの近代という特定の時代において創出された存在でしかないという議論は、人類学界ではごくありふれたものである。筆者もこの見方を踏襲し、人類社会の基本を構成するものではなく、あくまでも一つの時代の産物にすぎないと考えたい¹⁶。

3) 知識のスキーマ

① 身体と知識

知識を、自らの経験に基づく「経験的な知識」と、経験に基づかない「伝聞的な知識」の二つに分けることについては、異論はないものとする。また、われわれが知識を得るのは、まず身体を使つてのさまざまな活動のなかで、身体に備わった諸々の感覚器官を通して得られる情報によっており、経験的知識の前提条件とし「身体」を置くことについても大方の人に賛同していただけるものと思う。

¹⁶ 近代国家が比較的近い時代に、かなり人為的に形成されたものであることは、アンダーソンの『想像の共同体』[2007]やホブズボウムとレンジャーの『創られた伝統』[1992]に詳しい。これに、近代国家の人為性に対して言語の面から光を当てた名著（筆者はそう考える）田中克彦の『ことばと国家』[1981]を加えるのも一興かも知れない。

われわれはこうして、「身体—経験的知識—伝聞的知識」という階層構造を得たわけだが、筆者としてはいま一つ物足りなさを感じていた。身体と経験的知識を直接結びつくものと考えていいものかという疑念をどうしても消し去ることができなかった。

この疑念はなかなか解消されず、もやもやした気分が続いていた。ところが解決策は、思いがけないところからやってきた。フランスの人類学者 M.モースの「身体技法 (les techniques du corps)」[Mauss, M 1950 / モース 1976] という概念を思い出したのである¹⁷。

身体そのもののあり方は人類すべてにおいてほぼ共通であるとしても、歩き方や休息時の姿勢、道具の使用法等々の身体の「使い方」は文化によって大きく異なるというのがモースの主張であった。そしてそれは、子どもたちが集団（親密圏）のなかで成長する過程で身につけていくものと考えられるのである。本稿では、これを「身体的な知」として少々拡張してみたい¹⁸。意識化しえない身体的な技、それを含む形のより広いコンテキストでの「知」の在り方を把握しようということで、できあがったのが「経験と知識の基本形」の図である【図4】。

さて、知識をこのような形で捉えてみると、さまざまな興味深い可能性が拓けてくるように思われる。まず、知の在り処を身体のレベルまで広げることによって、日々の生活に何気ない動作に隠れた「身体的技能」から道具の使用、さらには「職人の技」なども、知識論の対象とすることが可能になる¹⁹。

道具の種類や形態は文化によってじつに様々だが、道具のあり方に応じる形で身体の使い方（まさに「身体技法」）が形成されていく。ここでも関係は相互的である。使い込むほどに道具がからだに馴染んでくる。それ同時に、からだも道具に馴染んでいき、最後に



【図4】 知識のスキーマ（基本形）

¹⁷ この重要かつ著名な概念を失念するなど、人類学者としてはまさに恥ずべき所業だ。もちろん知識はあったのだが、このスキーマに入れるという発想が当時はまったくなかった。汗顔の至りである。ある明け方、まだ夢うつつの状態のなかでふと思ひ浮かび、これは書きとめて置かなければ忘れてしまうと、むりやり起きてメモをとった。朝目覚めたときにはやはりすっかり忘れていた。だが、メモのおかげで思い出すことが出来た。夢のなかで大切なアイデアを得るという話を聞いたことはあったが、そういうことが本当にあるのだなあと、少々感激したものだ。

¹⁸ 生田久美子は、身体的な技能と知識の双方にまたがるものとして「わざ」という概念を設定し、ヨーロッパ的な心身二元論の枠組みを越える新たな知識観を打ち立てようと試みている [生田久美子 2007]。筆者の本稿での試みも同じ線上にある。

¹⁹ 文化と身体の関係については野村雅一 [1983, 1997] が参考になる。また川田順造は西アフリカ、フランス、日本の身体技法について興味深い比較を行なっている [川田順造 1979, 1992]。

はからだと道具はまさに一体として感じられるに至る。

こうした身体的な知は、自転車の乗り方や泳ぎ方に典型的に見られるように、言語化して説明することが困難な場合が多い。自転車の乗り方や泳ぎ方は一度覚えてしまえば、からだ覚えていてくれる。何年も、いや何十年も行なうことがなかったとしても、やってみれば最初はぎこちなくても程なくからだのやり方を思い出してくれる。しかし、自転車でのバランスの取り方や泳ぐときの息つぎのタイミングとからだの動かし方を言葉で説明するのは至難の業だろう。

こうした見方を取り入れることによって、「知識」の見え方はどう変わってくるのか。まずは職人の技から見ていこう。

② 職人の技と経験知

職人の技は、経験的な知識の極限的な形態の一つと言えるだろう。その継承が徒弟制度という形をとり、近代の学校教育に馴染まないのは、職人の技が深く身体に根ざすがゆえに、頭脳の働きを重視した近代教育のあり方とは相容れない一面があったということではないか。

ここで興味深いのは、そのような身体に深く根ざすという知のあり方が独り伝統的な技のみに限られるのではないらしいということである。自らが優れた旋盤工でもあった作家の小関智弘によれば、数値制御が一般化した高度に精密な機械を操るような場合でも、製品の最終的な出来を左右するのは人の感覚と経験によって培われた技にほかならないという[小関智弘 1999, 2000, 2003]。

また、自らも建築家だったファーガソンは、近代の技術のあり方を論じるなかで、たとえばコンピュータが発達したとしても、技術の根底を支えるのは現場の経験とそこで培われた経験的な知識にほかならないと主張し、それを「心眼（マインドアイ）」と呼んだ。たとえば、ときに設計図のなかの数値が一桁違ってしまうといった入力ミスが生じる。現場の経験が浅い者は気がつかずに見過ごしてしまうのだが、現場経験が豊富なものは実際に建造された構造物の記憶から、この数値はおかしいと感覚的にわかるのだという [ファーガソン, E. S. 1995]。

③ 経験知と身体的な知

ここまで来ると、脳に蓄えられると考えられてきた、いわゆる知識それ自体についても、身体との関係のなかでいま一度、捉え直されるべきではないだろうか。本稿はあくまでも「素描的な覚書」ととどまるため、このトピックに深入りすることは避けたいのだが、心理学者・下條信輔の説に少しだけ触れておきたい。

彼は創造性について「意識・前意識・無意識」の三者の関係のなかで論じる。そして、われ

われの知識の中で意識されているのはごく一部にすぎず、大部分は意識されない状態(無意識)にとどまっているとする。この無意識は身体に深く根ざしており、同時に身体を介することで他者に開かれているというのである²⁰。

例を挙げる。かつて行ったことがあるが、すでに行き方を忘れていた場所を再訪する。駅を出て出発点に立ったとき、おぼろげに記憶が蘇ってくる。その記憶に導かれて進んでいくと、分岐点でまた次の経路の記憶がおぼろに立ち上ってくる。そうして、ついに目的地にたどり着く。下條はこの事例について、思い出すとは脳の奥にしまい込まれていた記憶を取り出すといった作業ではない。脳は常に外界を探索している。記憶は、その探索のさなかに、外界に触発されながら無意識の底から意識の領域へと浮かび上がってくるのだ、と。

下條はまた「思考」についても、ポランニー [1980] の暗黙知の概念を借りながら、「それは知覚の様式や認識のスタイルを含む、手続き的な性質を持つ技能であり、論理的な知もその上に立ってはじめて花開く」[下條信輔 2008:281-2] と述べる。興味を持たれた方は本人の著作にじかにあたっていただくとして、この下條の説は意識と無意識、身体、他者等々の関係を統一的に理解する道をひらく可能性を秘めており、きわめて刺激的である。

④ 経験的知識と伝聞的知識

本稿では「知識」を身体をも含みこむ形で拡張してみたわけだが、この視点から経験的な知識をもう一度捉え返してみたい。

「経験的知識」は、何よりもまず暮らしのなかで形成されるものといえる。つまりそれは、受動的・静態的に感覚器に流れ込む情報を受け取るといった体のものではなく、暮らしにかかわる様々な行動を遂行するなかで、積極的に環境に関わり、そうした逐一の行動に必要な情報を能動的に獲得していく過程にほかならない。言い方を換えるなら、経験的な知識は常に、五感を含む身体と外なる自然の<間 (はざま)>に生成する統合的な知なのである²¹。

この経験的な知識には、さらに時間の次元が絡んでくる。人は行為するなかで積極的・能動的に情報を獲得していくわけだが、その際には当然、類似の状況下でそれまでに得てきた「知識や身体的な技能」が動員される²²。

たとえば、都会で樹木などにほとんど興味を持つことなく育ちオフィス勤めを続けてきたサ

²⁰ 下條の創造性についての説明や無意識の社会性に関する説はすこぶる説得力がある、と少なくとも筆者は感じている [下條信輔 2008, 2015]。

²¹ この点については、佐々木正人 [1994]、生田久美子 [1987] を参照のこと。

²² これは下條信輔のいう「来歴」に近い。彼は「来歴」について次のように定義している。「過去から現在に至る経歴のすべて … さらにそういう経歴に意味をなさしめる暗黙の前提、顕在的潜在的な文脈、身体的な暗黙知、そうしたものの総体が含まれる」[下條信輔 1999 :91]

ラリーマンと、寺社の建立などでまず山で木をじかに見て買うか否かを決めるところから始める経験豊かな宮大工の棟梁。この二人が同じ森林を見た場合を想像してみしてほしい。同じものを見ているといいながら、両者が得る情報の量や質が大きく異なるであろうことは想像に難くないだろう。

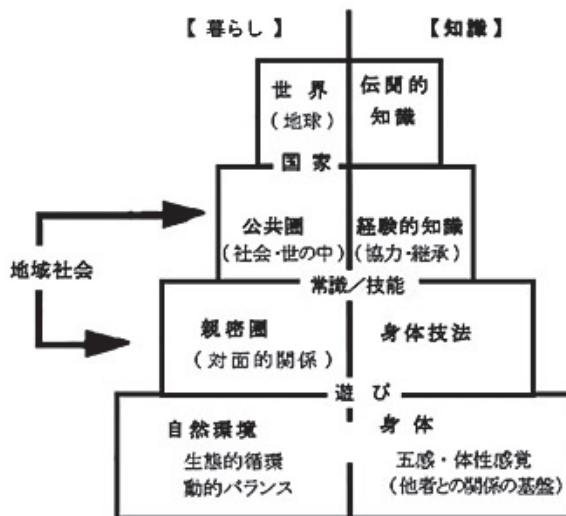
他方の「伝聞的知識」の最大の特徴は、経験的知識の中核をなしていた<身体>が欠けていることである。情報はほとんど<視覚と聴覚>に限定され、自らが<身をもって>経験したときに得られるはずの、多種多様な感覚情報が欠落している。生態的心理学の研究者 エドワード・リードも、経験から得る知識と間接的な情報との間には質的な相違が存在するとし、その違いを無視しがちな今日の傾向に警鐘を鳴らす [Reed, E. S. 1996 (邦訳 2010)]²³。もっとも情報量が多いといわれる視覚情報にしても、それだけでは十全とはいえず、手で触った際の質感や持った際の重量感等々の触覚的な経験の記憶（来歴）で補完されなければ、ごく貧しいものにとどまるのである²⁴。

また、伝聞的な知識と経験的な知識の重要な違いは、伝聞的な知識が常にほかの誰かの手によって選別され加工された、二次的なものだとところにある。殊にインターネットの場合は、誰でも自由に発信が可能という状況が情報の質という面では玉石混交の状態を招来し、それらの信憑性をどう担保するのかという深刻な問題が生じる。これとどう向き合うのかという課題は、今後いっそう重要性を増すに違いない。

3. 暮らしと知識の相関

1) 暮らしと知識の接合図

「基本形」の暮らしのなかで、伝聞的な知識が占める割合はかなり小さかったはずであり、日々の経験のなかで蓄積されていく経験的な知識が大半を占めていたはずだ。仮にそうだとすれば、知識が蓄積される場としての「暮らし」のあり方と「知識」のあり方と



【図5】暮らしと知識の接合図

²³ なお「生態的心理学」は、【2-2】-②】で紹介する「アフォーダンス理論」と、ほぼ同義と考えてよい。
²⁴ きわめて情報量が多く、感覚の中でも優位にあるとされてきた視聴覚だが、じつは触覚によって支えられ補完されることによって初めてその能力を十全に発揮できるのだという [中村雄二郎 1979]。

の間には相関があるはずだ。筆者はそう考えた。暮らしと知識の図を真ん中で割り、二つを合わせた図をつくってみた【図5】。

自然に対しては身体が、親密圏には身体的知識が、公共圏には経験的知識が、そして世界（地球）には伝聞的知識が対応することになる。それぞれの対の間にどのような関係があるのか、あるいは何もないのか。以下、同じレベルにある二項について、その関係を順次見ていくことにしたい。

2) 内外の自然

① 内外の自然、その意識以前のつながり

自然といえば、われわれの外にあるものと考えてるのが相場であろう。しかしそもそも論的にいえば、われわれも自然のなかで進化してきた生き物であり、あくまでも自然の一部をなす存在でしかないはずだ。「自然保護」だとか「地球を守れ」といった類の、しばしば耳にする物言いは、胎児が母体のなかから「母親を守るんだ」と叫んでいるような、まったく見当違いの発想のように思われる。身心を「内なる自然」とし、それに対してあえて「外なる自然」と称するもの、この事実を確認したいからにはほかならない。

それでは、内外の自然がどのように関係しているのかを見ていこう。これから述べるように、内外の自然」は幾重にも重なる形で密接不可分の関係をもつ。【図5】では、自然と身体の間壁に孔をうがうことで、それを示したつもりである。

i) 身体と外なる自然

元素のレベルでの物質循環

まず最も微細な原子や分子のレベルでは、身体も自然全体の物質循環の一環とみなすことができる。

身体を企画開発や営業、総務等々の様々な部門からなる会社組織に例えると、全体の構成は変わらないように見えても、それらを構成する人員は次々に入れ替わり、一定の時間がたつと、すべて別のメンバーに変わってしまっている。それと同様に、身体を構成する原子や分子も次々に入れ替わっており、一定の時間がすぎれば、すべての元素が入れ替わっているという。まさに「行く川の流は絶えずして…」の世界である²⁵。

²⁵ 福岡伸一 [2004, 2009] を参照。

共生体としての身体

もう一段上のレベルで身体全体を見渡してみると、それが一個の完結した存在ではないことに気づかされる。まずわれわれの皮膚の上には、目には見えないが多数の細菌が棲んでおり「常在菌」と総称される。これらの細菌は、有害な細菌類からわれわれの肌を守ってくれているという。

また腸内にも多種多様な菌類が棲みついている。それら「腸内細菌」は、数にして500種類以上、総重量は1.5キロに達するという。腸内フローラとも呼ばれるそれらの細菌は、近年脚光を浴び、その重要な役割が次第に知られつつある。これらのことから、われわれの身体は多種多様な微生物との共生体と見ることも可能なのではないだろうか²⁶。

ほかの生物にも目を向ければ、ウシとその胃の中の微生物、豆科の植物と根粒菌等々、生物の世界の共生の多様さと広範は眼を見張るものがあり、共生こそが生命の基本的なあり方の一つと言いたくなる。

生物の歴史を遡ってみると、多細胞生物の重要な一部となっているミトコンドリアや葉緑体は、かつては独立した生き物であったものが、ほかの生命体に取り込まれ、細胞内で共生するようになった可能性が大きいという²⁷。だとすれば、われわれはそもその始めから異質な存在が共に生きる共生体であったことになる。

内外の自然の呼応（あるいは身体と環境への適応）

そして第三のレベル、身体と環境の関係に目を向けてみたい。

赤道近辺の紫外線が強い地域では、皮膚ガンなどから身体を守るためにメラニン色素が多くなり肌の色は黒くなる。高緯度の紫外線が弱い地域ではメラニン色素が少なく肌の色は白くなり、ビタミンDの合成も阻害されずにすむ。こうした皮膚の色と環境の関係はよく知られた事実であろう²⁸。

汗についても、熱帯地域の住民は少量の発汗で効率的に熱放散を行なう能力を持つとされる。大量の汗をかいて衣服がびしょりと濡れるような状態は、蒸発による体熱の放散という本来の機能を果たしてはず、無駄に体力を消耗しているにすぎない。熱帯に生きる人々は、発汗を

²⁶ 腸内細菌については平山和博 「腸内細菌叢の基礎」 [最終閲覧日:2020_08/28]

https://www.eiken.co.jp/uploads/modern_media/literature/MM1410_03.pdf

皮膚の常在菌については吉田理香 「皮膚の常在細菌について」 [最終閲覧日:2020_08/28]

<https://www.thcu.ac.jp/research/column/detail.html?id=110>

²⁷ 黒岩常祥 「ミトコンドリアと葉緑体はどこからきたか」 [最終閲覧日:2020_08/28]

https://www.toray-sf.or.jp/aboutus/pdf/54-h16_2.pdf

²⁸ 環境省 「紫外線による健康影響」 [最終閲覧日:2020_08/28]

https://www.env.go.jp/chemi/uv/uv_pdf/02.pdf

蒸発可能な適正な量に保つことによって、体力の消耗を抑えつつ効率的に体温の調節を行っているのだという²⁹。

またエスキモー／イヌイトと呼ばれる極北の民族が生肉を食べることについても、この食習慣は単なる嗜好の問題ではなく、生存のための戦略にほかならないことが知られている。つまり極寒の植物性の食物が希少な環境にあつて、加熱で壊されやすいビタミン類を必要なだけ摂取するためには、まだそれらが破壊されていない生の状態で食することが必要だったのである³⁰。

こうした身体的な適応の例は枚挙にいとまがない。人類の環境への適応は、主として文化によっており、身体の変化は最小限に抑えられている。それでも同一の環境で暮らす間に、身体はその環境に適した形に変化していく。内なる自然が外なる自然に呼応するのである。

ii) 心と自然

人類の心的特性も、その進化の大部分をしめる採集狩猟生活のなかで、周囲の自然とともに生きるのに適した形で進化してきたと見ていいだろう。しかし、この領域について筆者は完全な門外漢のため、いくつかの要点を列挙するにとどめたい。

まず最初に指摘しておきたいのが、コミュニケーションの基盤としての身体である。われわれの喜怒哀楽に代表される感情とその表出（表情など）のあり方、痛みなどのさまざまな身体的感覚を、言語的に説明しようとすればきわめて困難である。しかしわれわれはさしたる不便もなく意思の疎通ができています。これは要するに、そうした感情や身体的な感覚が共通のものとして与えられているはずだという認識がすべての人の暗黙の前提になっていて、あえて意識する必要すら感じないのではないか——という可能性にたどりつく。

言葉なしで抽象的な事गरらを伝えるのはきわめて難しいが、喜怒哀楽などの感情の表出は文化に関わりなく、世界のどの地域の人でも即座に適切に理解する。つまり言語文化的・意識的な相互理解に先立って、それを可能にする共通の基底として身体が存在するというわけである³¹。

身体は、人と人との交流の基盤であるとうじに、外なる自然との交感の基盤でもある。「内外の自然」が幾重にも重なる形で密接不可分の関係をもつことはすでに見てきたとおりである。では心は——と考えると、人類発祥のときから 700～800 万年、われわれの祖先は自然のただ中に生き、そこに適合するように進化してきた。

²⁹ 松本孝朗／小阪光男／菅谷潤壺 [1999]。

³⁰ 「イヌイトの食事とは」【最終閲覧日:2020_08/28】
<https://liberal-arts-guide.com/inuit-cuisine/#1-2>

³¹ 近年「共感 (empathy)」として注目されている能力がこれにあたると思われる。『ヒューマン』(NHK 出版)には、そうした人類に共通の心理的特徴についての興味深い実験がいくつも掲載されている。

緑色が安らぎを与えるとされるのは、おそらくわれわれの祖先がチンパンジーの祖先と分かれた遥か以前から暮らしてきた森の記憶の残像がそうさせるのではないか³²。また、川のせせらぎの音や炎のゆらめき、木目、われわれの心臓の鼓動など、自然界の至るところに存在する「1/f ゆらぎ」がわれわれの気持ちを落ちつかせ、リラックスさせる効果があるとされるのも、われわれの心が自然のなかでそれに寄り添うかたちで形成されてきたからなのではないか³³。

現在、精神的な病や心身症、老化による病（痴呆症など）に対して、森林浴や森林療法、園芸療法等々、自然に接することが治療法の一つとして提唱され、相応の効果をあげているとされる³⁴。これもまた、われわれの心的特性が、自然のなかにあることを自明の前提条件として形成されてきており、自然の中にあつてこそ本来の能力を発揮しうること、逆に言うなら、生活環境が自然から遠ざかれば遠ざかるほど望ましい状態からも遠ざかることを傍証しているのではないだろうか。現に、都市的な（人工物が主体となる）環境はストレスが多く、精神的な病のリスクが増加するとする報告も散見される³⁵。

誤解しないでいただきたいのだが、筆者は自然と心との関係を積極的に検証し、主張するつもりはない。ここではただ、可能性を示唆することができれば、それで十分である。

② 外界の認識

ここまで内外の自然の関係を追ってきたわけだが、次は、われわれが「外界をいかに認識しているのか」ということを考えてみたい。

まず、環境とはすべての生物に共通する客観的外在的なものではなく、それぞれの生物が能動的に構築する、生物種ごとに異なる独自の世界があると主張したのは、ドイツの生物学者にして哲学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルだった。ユクスキュルは、このそれぞれの生物に独自の世界を「環世界（Umwelt）」と名づけた〔ユクスキュル 2005〕。有名なダニの例では、ダニには視覚も聴覚もなく、それらの刺激はダニにとって存在しない。ダニは樹上で待っていて、獲物が発する酪酸の匂いと体温を感じとり、獲物の上に落下して手探りで皮膚の適当な場所を見つけて血を吸う。ダニの世界は、嗅覚と温度感覚、触覚の情報のみからなる——というわけである。

³² 「緑・グリーンが人間に与える効果」〔最終閲覧日 2020_08/28〕

<https://beehave.infodex.co.jp/entry/green>

³³ 武者利光「F分の1 ゆらぎの謎にせまる」〔最終閲覧日 2020_08/28〕

<https://www.nagano-c.ed.jp/seiho/intro/risuka/kadaikenq/paper/2008/2008-08.pdf>

³⁴ 浜田久美子〔2002, 2008〕は森林の心に対する効果についての総合的な入門書といえる。森林浴/森林療法については、上原 巖〔2003〕 宮崎良文〔2003〕などを参照。寺岡佐和/小西美智子/小野ミツ/宮腰由紀子〔2016〕「認知症高齢者への園芸活動が認知機能編にもたらす効果」『老年看護学 21-1』

³⁵ 「「都会」と「田舎」でこれだけ違う「脳ストレス」」〔最終閲覧日 2020_08/28〕

https://www.excite.co.jp/news/article/HealthPress_201610_post_2593/

アメリカの心理学者J・J・ギブソンが提唱した「アフォーダンス」理論は、ユクスキュルの発想をさらに精密化し、個別の行動を把握可能にしたものと見ることができる³⁶。ギブソン以前の心理学では、環境と主体はそれぞれ独立に存在するものとして措定され、その両者がどう関わっているのかを捉えようとした。それに対してギブソンは、あくまでも主体と環境がすでにく関わりつつある場を前提とし、その相互的な関係のなかで両者を捉えようとした。

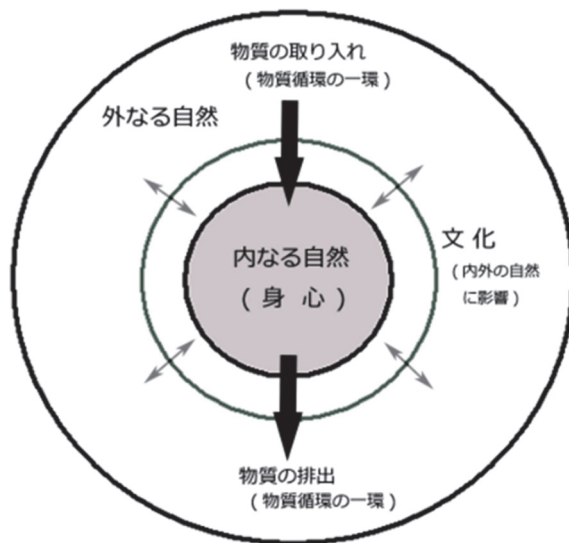
たとえば、いま目の前にある切り株は座るといふ行為の可能性を内包 (afford) する。だが、その可能性は、切り株自体の大きさや形状といった条件だけでなく、その前に立っている行為者の側の条件 (彼の体格に切り株の大きさが適しているか/彼は疲れていて休息を取りたい状態なのか、それとも先を急いでいて休息など論外と思っているか … 等々) とのく関係によって複合的に定まるのである。

あるいは触れるという動作。ベルベットの布に触れる、紙の箱に触れる、ガラス玉に触れる、われわれは対象の違いに応じてく触れ方くを変える。が、同時にそのようにして触れ方を変えることで、対象についてより正確で豊かな情報を得ることが可能になる。触れるという行為自体が、行為者と環境の相互作用にほかならないのである。

行為者と環境はつねに互いに影響を与えあう相互的な関係のなかにあるとするこの理論は、行動と環境との関係をより具体的かつ精細に分析することを可能してきたといえる。

③ 界面 (インターフェイス) としての文化

もちろん人間も生き物として、この生物種に固有の感覚によって世界を把握する。人類はイヌのように鋭い嗅覚もなければ、コウモリのように超音波を操れるわけでもない。だが顔面に並んだ目は立体視によって対象との距離を正確に把握することができ、多様な色彩を感知する能力も備えている。人間の感覚をひとまとめにして五感というが、人類はこの五感によって把握した「種」独自の世界に生きてい



【図6】界面 (インターフェイス) としての文化

³⁶ 佐伯 胖/佐々木 正人 (編) [1990]、佐々木正人 [1994] を参照。なお、本文中の以下の記述では、筆者なりに専門用語をより簡明な言葉に置き換えている。

るといえるのである。

ところが人類の場合は、これらの感覚情報に加えて、文化という要素が無視できない存在になっている。本稿ではとりあえず、文化をわれわれと外界の間にあって両者を仲立ちする「界面」（インターフェイス）としておこう【図6】。そう言うただけでは何のことか皆目わからないだろう。具体的な例を挙げて説明してみよう。

食物

先にわれわれの身体は、自然界の物質循環の一部とみなせることを紹介したが、ここでもすでに文化が働いている。たとえば昆虫類は、客観的にみれば良質のタンパク源で理想的な食物とすら言える³⁷。実際に昆虫を食している民族も多い。しかし、今の日本人の大多数は虫を食物と考えることには怖気を振るうに違いない。同様にして、ある文化では食物として普通に食べられているものが、別の文化では極度に忌避される存在になるといった例は、枚挙にいとまがない。

毒があれば食べないというものでもない。南米アマゾン河流域の住人は青酸系の猛毒を有するキャッサバを栽培し主食とする。日本列島の住人は猛毒と知りつつフグという魚を食し、毎年中毒者を何人も出しながら、食べるのをやめる気配はない。われわれは必要とする物質を外なる自然から「食物」として摂取するわけだが、何を食物とするかは文化によって規定されるのである³⁸。

分類

人類は言葉なるものを駆使し、周囲のほとんどのものに名前をつけるという習性を持つ。その命名は、動物や植物、親族、身体部位など、似通った者同士をひとつのまとまりとし、しばしば体系（システム）をなす。そしてこの命名の体系は、文化によって異なるのである。

たとえばニューギニアのカラム人は、動物群に内在するさまざまな相違点に注目しつつ、骨があるものとないもの、羽があるものとないもの、足の数（二足／四足／足なし）等々、彼ら独自の規準によって動物を分類する [Bulmer 1967]³⁹。

人類の感覚器官は基本的に共通と考えられる以上、人類はみな同じものを見ているはずなのだが、どうもそうではないらしい。日本語では「水」「湯」「氷」「汁」「液体」等々に分けられ

³⁷ 国連食糧農業機関 (FAO) は、2013 年に世界の飢餓対策として昆虫食を推奨する報告書を発表している。“Edible insects Future prospects for food and feed security” [最終閲覧日: 2020 年 8 月 27 日] <http://www.fao.org/3/i3253e/i3253e00.htm>

³⁸ あくまでも「規定」であって「決定」ではない。変更は可能である。

³⁹ こうした分類の体系は「民俗分類 (folk taxonomy)」として研究の対象になってきた。

ている存在が、タイ語では「nam」の一語で表現されてしまう。「nam 水」「nam roon 熱い水(湯)」「nam kheng 硬い水(氷)」「nam plaa 魚の水(魚醤)」「nam som みかんの水」「nam taa 目の水(涙)」「nam man アブラの水(油・ガソリン)」といった具合である⁴⁰。

さらに視野を広げれば、色彩について二つ(白/黒)に分類する民族もいれば、三つ(白/黒/赤)、四つかそれ以上…に分類する場合もある。これもじつに様々である [ドイッチャー 2012]⁴¹。

われわれの網膜にうつる映像が同じであったとしても、その総体としての世界をどう切り分け、どうグループにまとめるかは文化による。自然界についてのさまざまな分類は、あくまで自然のあり方に沿いつつも、各民族独自のものの見方が反映されているらしいのである⁴²。

暮らし方の在り方

基本形の社会は一般に、自然への依存度が大きく、各地の自然環境に応じた形で文化が形成されるということが出来る。アフリカの熱帯雨林に生きるピグミー、北極圏の極寒の地に住むエスキモー・イヌイト、ヒマラヤ山麓標高 3000 メートル以上の寒冷な高地に住むラダック…。現在、世界には 6000 以上の民族がいるとされるが、地球上の環境が多様なのに応じて、じつに様々な暮らし方が展開されている。

しかし、人類の暮らしはただ自然の影響を受けるだけのものではない。ケニアを中心とする東アフリカには農耕民と牧畜民がモザイク状に混在する。彼らはほとんど同じ環境に暮らしているが、生業による環境との関わり方の相違から、農耕民と牧畜民では家族形態や生活様式、宗教に至るまで大きな異なりをみせる。

また一定の範囲内ではあるが、人類は自然に手を加え、それを改変してきたことも忘れてはならないだろう。

農耕は、まさに文化的な手段(道具・技術・知識)を用いて、自然を改変する行為といえる。たとえば「焼き畑」は、日本では自然破壊的な行為という認識が定着してしまっているようだが、とんでもない話だ。伝統的な焼き畑は同じ何か所かの畑地をローテーションで利用するため、原生林の破壊にはならない。むしろ原生林を保全する働きすらあるといえる。森林破壊と糾弾される農法は近代になってから生じた、伝統的な焼き畑とは似て非なるものであり、専門

⁴⁰ 「nam」は本来ならコンテキストに応じて「水」「汁」「液体」など適切な訳語をあてるべきなのだが、少々の遊び心ですべて「水」と訳してみた。違和感を感じていただけたら幸いである。

⁴¹ 色彩の分類もなかなか面白い分野なのだが、残念ながら本稿では割愛せざるをえない。

⁴² そしてこの集団ごとに独自の分類は、「象徴的二元論」などに代表される「世界観/コスモロジー」へと連なっていく。

家はこの破壊的な農法を「火入れ開墾」と名づけて本来の焼き畑から区別している⁴³。そもそも、焼き畑が森林を破壊する行為なら、何千年も続けられるはずがない。自然に手を入れつつも、破壊は避ける。少なくとも現存する世界各地の集団はそうしてきたからこそ、生き延びてこられたのではないのだろうか。

人が手を入れることによって自然をより豊かにすることも可能である。東南アジアを始めとして世界の各地に見られる「樹木菜園」は、家のまわりに有用な樹木を残し、その間に野菜などを植える。また日本の「里山」は、人間にとって有用な状態が続くように、定期的に樹木を伐採することで遷移の進行をとめる。この行為は千年以上にわたって行われてきたため、里山にしか棲めない生物種が多数誕生しているほどである。

いずれの場合も、自然そのままの状態よりも、生物種もそれぞれ種の個体数も増えており、人が自然を豊かにしたと言ってもいいのではないだろうか⁴⁴。この点について筆者は、人類が自然と関わる際の二つの方向(1)破壊と汚染：自然を思うがままにコントロールしようとし、結果として「破壊／汚染」を招来してしまう近代的な行き方と、(2)利用と保全：世界各地の伝統的社会の「保全／利用」を旨とし、やり方次第では自然をより豊かにすることも可能な行き方——として提示してきた。

ほかのほとんどの生物は周囲の環境との関わり方は遺伝によって定められている。しかし人類は文化をもち、それを介して外なる自然と向き合うことで、生存の可能性を広げてきたのだと考える⁴⁵。

3) 親密圏と知識

① 多様な人々との関係

本稿のスキーマでは、親密圏に対応するのは身体的知識であった。しかし親密圏は身体的な知識にとどまらず、人が人であるために不可欠の能力を身につける場として、きわめて重要な位置を占めている。

ここで親密圏の集団の特徴を思い出してほしい。この集団は長期にわたって対面的かつ親密な関係を維持する。その成員は親族や姻族としての関係をもつこともあれば、単なる近隣の関

⁴³ 横山 智 [2013] は、ラオスの焼き畑を現地調査研究し、それが環境破壊的ではないことを証明している。宮本基杖 [2010] は熱帯林減少の主因が焼き畑ではなく、近代のさまざまな要因が関わっていることを論じている。また佐藤廉也 [2016] は、高校の教科書の記述を調べるなかで、なぜ「焼き畑イコール森林」というイメージが拡散してしまったのかを論じている。

⁴⁴ 熱帯における自然利用については、渡辺弘之 1989、Laundauer and Brazil (eds) 1990、国際有機農業運動連盟アジア会議 1994、等を参照されたい。日本の「里山・里地・里海」については、武内／鷺谷／恒川 2001、重松敏則ほか 2010、養父志乃夫 2016 等を参照されたい。

⁴⁵ 類人猿も文化をもつことはすでに周知の事実であるが、ここでは論じない。

係であるかもしれない。集団内にあるさまざまな組織のメンバーとして絆を共有しているかも知れない。しかしどのような場合であれ、集団のメンバーは老若男女、さまざまな世代や年齢の人々を含む。小さな集団とはいえ、その関係は濃密であると同時に多様性に富んでいる。

子どもたちはこのメンバーたちの中で生まれ、そしてそれこそが人が人として成長するための貴重な場となるのである。子供を育てるのは両親だけではない。祖父母やオジオバたちはもちろん、近隣に住む人々すべてが親と同等の役割を果たす。たとえば筆者自身の経験だが、タイの農村では隣近所の子どもが遊びに来ていっしょに食事をとることなど日常茶飯事である。筆者は最初のうち、どの子がその家の子供なのかわからなくて、大いに戸惑ったものだった。それくらい隣近所の子供と自分の子との間にわけ隔てがなかったのだ⁴⁶。

そうした多様な関係のなかでも、ひととき注目されるのは子どもと祖父母世代との関係である。人類学では父母と子どものような隣り合った世代を「隣接世代 (adjacent generation)」とし、祖父母と孫のように隔たった世代を「互隔世代 (alternate generation)」として区別する。何故わざわざそのような区別をするのかといえば、知識の継承における互隔世代(祖父母と孫世代)間の関係の重要性が注目されているからである。子供と隣接世代の関係にある両親は働き盛りの現役であり、集団内でも重要な役割をもつ。それに対して祖父母の世代はすでに現役を引退しており、現役世代に比べれば時間に余裕がある。この祖父母の世代が孫世代の面倒を見、そこでさまざまな知識の継承が行われるというわけである。

こうした社会では「遊び仲間」も、異なる年齢の子どもたちで構成されるのが普通である。年長の子は幼い者たちの面倒を見るのが当然とされ、そうするなかで年長者としての自覚と能力を身につけていく。幼い者たちも、その年長者を見ながら自分が年長者になったときにどうふるまうべきかを学ぶ。

② 集団のなかで人になる

生まれたばかりの幼児は、誕生した時点では人としての能力をまったく持たないように見える。ところが生後1年くらいから、立つ、歩く、話すなどの人類に特徴的な能力を急速に発達させていく。

言語が最もわかりやすい例なのだが、まわりの人々は子どもが話せるようになるために、様々な形で働きかける。しかしその言語の音素や語彙、文法などを<系統立てて>教えているわけではない。子どもはむしろ、大人たちの断片的かつ非体系的な働きかけを手がかりに、能

⁴⁶ インド北西部カシミールに居住するラダックの村での人々と子供の関係も、タイの村と同様、子どもはたくさんの人に見守られ、その人々の手厚いケアのもとで育つ [Norberg-Hodge 2000]。これは基本形の集団に共通の特徴とっていいだろう。

動的に言語能力を発達させているかに見える⁴⁷。

人間は生まれるまえから言語を操る能力を（潜在的な形で）備えている。幼児は人類の言語なら、どの言語でも話す能力がある。しかし実際に言語を話せるようになるには、どこかの集団内で育てられ、特定の言語を身につける必要がある。だからこそ、子どもがまだ幼い内に別の言語が話されている環境に引っ越せば、そこで話されている言語を急速に身につけていくのである。

人間の様々な能力（身体技法も含めて）は大部分が同様の形、すなわち誕生の時点では潜在的な形にとどまっていたものが、集団内で育てられることによって初めて具体化（それはすなわち限定でもある）するのである。この具体化された能力は、まさに文化によって規定され、それぞれの集団に固有のものとなる⁴⁸。

しかしここで今日の社会に目を移すと、この親密圏が崩壊の危機に瀕しているのではないかと危惧せざるを得ない。子育ての単位は地域から「核家族」にまで縮小し、しかも父親は仕事で忙しいからと、ひたすら母親独りに責任が覆いかぶさる。それだけではない。一家団欒などというものすら、昭和のノスタルジーの中にしか存在せず、「孤食」や「個食」といった言葉に象徴されるように、家族すら今や解体の危機にあるかに見える。

このような状況は、基本形との対比、すなわち人類史的な観点にたって見れば、きわめて異常な状態と言わざるを得ない⁴⁹。

4) 経験的知識と公共圏

① 親密圏を超えた知識の共有

基本型の暮らしについては自給的な集団を想定していたが、そうした集団では日々の活動の多くを協働で行なう。日本の農村を例にとれば、田植えから虫送りの儀礼、稲刈り…と農作業のさまざまな場面とともに働くことが求められるし、年に何度かある村の祭礼や婚儀や葬儀、茅葺き屋根の葺き替えや家の建て替え等々、共同作業を求められる機会はきわめて多い。

そのような環境で生まれ育ち、成人して結婚、親の跡をつぎ…となれば、村内のほとんどの人間は互いを熟知した間柄になって当然だし、知識もその大半を共有するとみられる。暮らしの共有はすなわら経験の共有であり、それは知識の共有につながる。そう考えて概ね問題はな

⁴⁷ こう言うとチョムスキーを思い出す方がいるかもしれない。しかし筆者は彼の理論には問題ありと見ている。彼の考え方では言語の多様性を無視することになってしまうからだ。田中克彦 [2000] を参照されたい。

⁴⁸ 無限に開かれていた可能性が、限定されることによるのみ具体化（実現）が許される。これはなかなか含蓄に富むと思うのは筆者だけか？

⁴⁹ 2018年、東京23区内での孤独死は5953人に達したという。象徴的な数字ではないだろうか。
<https://www.bestworkers.jp/ihin-seiri/dying-alone-2018/> [最終閲覧日: 2020年8月27日]

いだろう。

そこで次の問題は、親密圏を超えたところではどのような形の知識の共有がありうるか——ということである。この点についても、「自給的集団と外部」「職人の世界」「常識」という三つの具体的な事例で考えてみたい

② 自給的集団と外部

自給的な集団というと、暮らしに必要なものは基本的に内部で充足されるため、外に対して閉ざされた集団というイメージがあるらしいのだが、そんなことはない。ほとんどの集団はつねに外に向かって開かれている。すでに見たように、アフリカ中央部の森林地帯に住むピグミーは数十人程度のバンドを暮らしの単位とするが、より広いネットワークがそれを補完し、バンドのメンバーはこのネットワークを使って頻繁に入れ替わっていた。

日本についても、網野善彦が切り開いた遍歴の職人や芸人の世界は、日本の村落がさまざまな形で結ばれていることを示してくれた⁵⁰。また、深山に孤絶しているかにみえる集落でも「塩の道」などの交通路によって海岸地方と結ばれ、塩を始めとするさまざまな物資とともに言葉や文化も伝えられていった。通婚関係があることも稀ではなかった。日本列島の山地にはそのような道が縦横に走り、集落を結んでいたのである⁵¹。

広く世界に目を転じれば、ヒマラヤの山麓に位置する、さしてかわり映えのしない埃っぽい田舎の町が、じつは交易の中継点として大いに栄えていたりもする⁵²。我々は近代以前の社会を、つつい遠隔地との交流の術を持たない未開の存在…と思ひ込みがちだが、これもまた根柢のない偏見と言えよう。日本の塩の道や、サハラを結ぶ交易路、東はイースター等から南米大陸まで、西はアフリカ沿岸のマガスカル等まで世界の海を股にかけたオーストロネシア系の人びとなど、近代以前の人びともわれわれが思う以上に外の世界と活発に交流していた。そのようにして開かれ、外の世界についての情報に絶えず接していたからこそ、「公共圏」的な関係や観念も成立し得たのではないだろうか。

③ 「職人」のネットワークと知識

筆者は職人について、独りコツコツ作業するイメージをもっていたのだが、調べてみると実態はかなり異なっており、さまざまな職業がじつに複雑に連携しあっていた。

杉の木一本に関わる仕事をみても、伐採は杣師（そまし）が、製材は木挽（こびき）が行な

⁵⁰ 網野善彦の遍歴の民に関する著作は膨大な数にのぼるため、ここで個別の著作に言及することは差し控えたい。

⁵¹ 宮本常一『山に生きる人びと』[2011]、大西拓一郎『言葉の地理学』[2016]などを参照されたい。

⁵² たとえば、カシミールのヒマラヤ山麓に居住するラダック人の首都 レーなど [Norberg-Hodge, H. 2000]。

い、その後は大工に引き渡されて、道具や家屋に使用される。また杉の樹皮は屋根や壁を拭くのに使用され、切り株も程度のいいものは樽材などに使われた [塩野米松 2001]。

山全体を見ても、炭焼きは10年から15年のローテーションで山から山を渡り、伐採と炭焼きを行っていた。彼らがつくった道は、山菜採りやきのこ採りに利用されるだけでなく、クロモジ採集者やイタヤ細工師など、様々な職人が通う道にもなったのである。ツタはアケビの細工師にとって天敵であったが、家畜を飼う農家や酪農家にとっては絶好の飼料であった云々。

山の産物の利用だけを考えても、炭焼き、林業家、酪農家、あけび細工、箕作り、葛布織り、石工等々、じつに様々な職があり、それらが複雑にからみあって、互いが互いの職を支えている。彼らは意図的に連携しようとしていたわけではないのだが、結果として自然の周期を熟知しその長期的な利用を前提とする、絶妙な協力のネットワークを形成していた [塩野米松 2001]。

これらの人びとは、日常的な生活を共にするという関係にはない。しかし同じ空間を活動の場とし、互いの行動が相互に影響し合うという点において、親密圏を超えたところで関係のネットワークを形成し、経験の一部を共有していると考えられるのではないだろうか。

職人たちの関係の広がりとはそれだけにとどまらない。知識（技）が世代を越えて継承されていくという、時間軸上の広がりも無視できない。もちろん親から子へと継承される場合も少なくない。しかし、日本の技芸についてしばしば用いられる「口伝」や「相伝」と言った言葉は、個別具体的な親子関係を越えて、より広く受け継ぐ資格をもつ者に伝えようという意味が感じられる。世阿弥の言葉「たとひ、一子たりと云ふとも、無器量の者には伝ふべからず。家、家にあらず。次ぐをもて家とす」という表現には⁵³、「親密圏」の関係を越えて「公共圏」に到ろうとする指向性が明確に表れているのではないだろうか。

まとめよう。暮らしの共有はすなわち経験の共有であり、それは知識の共有につながる。これは原則として正しい。しかしその逆「暮らしを共有しなければ、知識を共有できない」というのは正しいとはいえないようだ。何らかの形で経験の場を共有し、それが知識の共有につながるという可能性も考えておく必要があるようだ。

④「常識」(common sense/common knowledge)

「常識」は職人の場合とはまた違った形で、暮らしの共有がなくても知識の共有がありうるケースを提示しているように思われる。

ともに生きる集団のなかで蓄積された知識は、その集団の中で共有される。そして時が経つにつれて、代々受け継がれてきたこの知識は、集団内の個々人を超えた「公共圏」に属するも

⁵³ 『風姿花伝』 <https://koten.sk46.com/sakuhin/kaden.html> [最終閲覧日: 2020年8月25日]

のとみなされるようになっていくのではないか。本稿ではさしあたり、これを「社会全体に共有されている、またはそのように〈想定〉されている」知識としておきたい。

ここで「想定される」という一文を挿入したのは、「あいつはまるで常識がない」といった表現、また「常識はずれ」や「非常識きわまりない」といった表現における「常識」に含意されているものは、ただ単に集団に共有された知識というよりも、一種の「規範」としての色合いを帯びていると見るからである。

親密圏と公共圏の関係について論じた際に、集団の成員が守るべき規範は成員間の対等かつ相互的な約束事としてではなく、外部からの、いわば定言的な命令として発現すると述べた。

「常識」もまたそうした規範的な性格を、ときに幾分かは担わされるのかもしれない。

少し視点を変えてみる。職人の項で「口伝」や「相伝」について述べたが、日本の老舗にしばしば登場する「家訓・社訓・社是」といったものも、後の世代の人々（後継者）への「定言的な命令（助言?）」と見ることができるだろう。近江商人の「世間によし」が公共圏を意識化したものとは言えないか、とすでに述べた。これと同様、社会全体を考えて行動せよとする「家訓」等は多く、筆者はここに日本人の「公共圏」に対する意識を垣間見る思いがする。時間軸上に展開される「公共圏」とでも言うべきか⁵⁴。

そして、ここに述べた家訓や社是のような姿勢はしばしば内面化され、「職人氣質（かたぎ）」と称されるようなメンタリティ、独特の職業倫理を生んできたのではないか。また、そうした内面倫理を再度外部に投影したその先に、「お天道様に顔向けできないことはするな」といった精神的姿勢、「宗教の原初的形態」ともいうべき思念を想定するのはうがち過ぎだろうか？⁵⁵

人々が共有するのが当然とされるこうした「常識」のあり方は、近年大きく変容を遂げつつあるように見える。たとえば「地球は豊かで人生は本来もっと楽しい」をモットーとするらしいプログラマーは「常識かどうかの判断は、所属しているグループが決める」「グループが変われば、常識もガラリと変わる」と主張し、日進月歩、秒進分歩のいま世の中で、古臭い常識などに縛られてはならないというのが「今日の常識」とまで言う。常識は変化に抵抗する旧弊の代表格、進歩を阻む悪しき障害物に墮してしまっただろう⁵⁶。人々の暮らしのあり方が知識を規定し、さらに「常識」のあり方を規定すると考えるなら、このような「常識観」はいかにも今日

⁵⁴ 日本は他国と比べて、100年存続している「老舗」が飛び抜けて多いらしい。なぜそうなのか、かなり興味深い。野村 進は日本の老舗を追い続け、興味深い論考を発表しているが [2006, 2014]、日本に老舗が多い理由については断片的・差別的に述べているにすぎない。残念である。

また海外にも老舗的存在はあるわけだが、社是や家訓に類するものはあるのだろうか。ぜひ知りたいところである

⁵⁵ じつは日本から東南アジアにかけての地域の宗教（アニミズム的な）も、いつかは論じてみたいテーマの一つなのだが、ここでは禁欲するしかない。このトピックについては、岩田慶治 [1985, 1989, 1991]、鈴木秀夫 [1978] などが示唆に富む。

⁵⁶ 「常識と非常識 どっちがあなたの幸せ？」 [最終閲覧日:2020_08/27] <https://sketch-life.com/life/5886/>

の時代に即したものと見ることもできるだろう。

急激な変化が当然視される世界、そこでは人々は世代どころか年齢によって細分化され、社会全体が共有する知識のようなものを 想定することはもはや不可能なのだろうか。これもまた、今日の社会や人間関係のあり方として、考えてみたいトピックではある。

5) 世界（地球）と伝聞的な知識

最後に「世界」と「伝聞的な知識」が残ったわけだが、ここで「公共圏」と「世界（地球）」の違いに、もう一度注意を喚起しておきたい。「公共圏」は地域に生きる人々の関係の総体として、人びとが＜思い描く＞世界の外縁といえる。それに対して「世界」は、図に「世界（地球）」と書き表したように、物理的・空間的な広がりとしての性格が強くなる。

この「世界」の表象は、たとえば宇宙から撮影した地球の映像、青い球体をあげることができるだろう。それはいわば「地動説」的な世界といえる。それに対して「公共圏」は「天動説」的な世界といえるかもしれない。われわれが生きる＜ここ＞が世界の中心であり、そしてその生きられた世界の外縁として「公共圏」が存在するというわけである。少々禅問答めいてきただろうか。しかしやはり、この両者を混同することは、議論を混迷させる原因になると筆者は考えるため、あえて注意を喚起する次第である。

「基本形」の中での「世界（地球）」の比重はかなり小さいと言っていいだろう。ここでの暮らしの中核は「親密圏」の互いによく見知った人びととの関係であり、それを取りまく周囲の「身近な自然」との関係になる。大雑把な言い方をすれば、「世界（地球）」は必要ない。

他方、今日の暮らしは、地球サイズにまで広がる巨大な経済システムに大きく依存する形になっており、それに反比例する形で、身近な自然との関わりや集団内の協力関係は薄れているということができるだろう。

知識についても、基本形においては伝聞的な知識が占める比重は比較的小さいといえる。他方、今日の世界においては「マスメディア」や「インターネット」によってもたらされる世界規模の情報が、圧倒的な重要性と物量を誇るに至っている。

このように「世界（地球）」と「伝聞的な知識」は、基本型のなかではともに重要度が低いものに対して、近代世界では重要度が飛躍的に増大する。したがって、これらについては近代世界との関係において論じることが ふさわしいと考える。そこで、これらについては「時間の軸」を導入し、近代世界と基本形を比較するなかで、何がどのように変化したのかを含めて、稿を改めて検討することにしたい。

4. いささか唐突な結語

じつは本稿のここまでの記述は、当初予定していた内容の半分ほどにすぎない。書き始めると長くなる…という悪癖が今回も出てしまい、そのまま書いていったのでは与えられた字数を大幅に超過してしまうことが明らかになったので、ここでひとまず締めることにした。

暮らしと知識をこのような形で把握することが可能ではないか…という、いわば思いを文章にしてみたわけだが、本稿に続けて次の二つのテーマを考えている。

- (1) 「発見の図式」としての可能性を探ること。
- (2) 本稿で述べた「基本型」の在り方と対比する形で、近代世界のあり方を浮き彫りにする。

(1) の「発見の図式」は、本来この稿で論じる予定だったトピックである。本稿のスキーマについて、そのように図式化できたからといって、だから何なのだ——という身も蓋もない疑念を抱かれる方も当然いるはずだ。そこで、暮らしの領域では「経済」のあり方について、知識の領域では「言語」について、このスキーマを用いて考えることで、いささか興味深く視角>を得られるのではないかという感触を得ている。これについては、できるかぎり早い機会に発表したいと考え、現在執筆中である。

2020年8月29日脱稿

■ 文 献 ■

□ 日本語文献 □

- アンダーソン, ベネディクト 2007 『定本 想像の共同体』 書籍工房早山
- 池澤夏樹 1992 『母なる自然のおっぱい』 新潮社
- 生田久美子 2007 『「わざ」から知る』 東京大学出版会
- 岩田慶治 1973 『草木虫魚の人類学: アニミズムの世界』 淡交社
- 1984 『カミと神』 講談社
- 1985 (1979) 『カミの人類学』 講談社学術文庫
- 上原 巖 2003 『森林療法序説』 全国林業改良普及協会
- 内山 節 2005 『「里」という思想』 新潮社
- 2006a 『「創造的である」ということ (上): 農の営みから』 農山漁村文化協会
- 2006b 『「創造的である」ということ (下): 地域の作法から』 農山漁村文化協会

- 2015 『半市場経済』 角川書店
- NHKスペシャル取材班【編】 2012 『ヒューマン: なぜヒトは人間になれたのか』 角川書店
- 大西拓一郎 2016 『言葉の地理学』 大修館書店
- 小関智弘 1999 『ものづくりに生きる』 岩波書店
- 2000 『鉄を削る: 町工場の技術』 ちくま文庫
- 2003 『職人学』 講談社
- 落合恵美子 編 2013
- 『変容する親密圏／公共圏 1: 親密圏と公共圏の再編成』 京都大学学術出版会
- 桶川 泰 2011 「親密性・親密圏をめぐる定義の検討」『鶴山論叢』11号, 神戸大学
- 川田順造 1979 『サバンナの博物誌』 新潮社
- 1992 「身体技法の技術的側面」『西の風・南の風』 河出書房新社
- 神代雄一郎編 1977 『日本のコミュニティ』 鹿島出版会
- クラストル, ピエール 1989 『国家に抗する社会』 水声社
- 国際有機農業運動連盟アジア会議 1994
- 『現代農業臨時増刊号: アジア型有機農業のすすめ』 農山漁村文化協会
- 佐伯 胖／佐々木 正人 (編) 1990
- 『アクティブ・マインド: 人間は動きのなかで考える』 東京大学出版会
- 佐々木正人 1994 『アフオーダンス: 新しい認知の理論』 岩波書店
- 塩野米松 2001 『失われた手仕事の思想』 草思社
- 2011 『手業に学べ: 心』 ちくま文庫
- ジークリスト, C 1975 『支配の発生』 思索社
- 重松敏則ほか 2010 『よみがえれ里山・里地・里海』 築地書館
- 下条信輔 1996 『サブリミナル・マインド』 中公新書
- 1999 『〈意識〉とは何だろうか』 講談社現代新書
- 2008 『サブリミナル・インパクト』 ちくま新書
- 2015 「潜在脳、自由意志、社会」, 大澤真幸 (編) 『身体と親密圏の変容』 岩波書店
- 下条信輔／タナカノリュキ 2012 『サバイバル・マインド』 筑摩書房
- 菅原和孝 1997 「物と心のあいだ」
- 青木 保他 (編) 1997 『岩波講座人類学 3: 「もの」の人間世界』 岩波書店
- スコット, ジェームズ・C 2013 『ゾミア: 脱国家の世界史』 みすず書房
- 鈴木秀夫 1978 『森林の思考・砂漠の思考』 NHK ブックス
- 武内和彦／鷲谷いづみ／恒川篤史 2001 『里山の環境学』 東京大学出版会

- 田中克彦 1981 『ことばと国家』 岩波書店
 2000 (1983) 『チョムスキー』 岩波書店
- 多辺田政弘 1990 『コモンズの経済学』 学陽書房
- ダンバー, ロビン 1998 『ことばの起源』 青土社
- 寺岡佐和／小西美智子／小野ミツ／宮腰由紀子 2016
 「認知症高齢者への園芸活動が認知機能編にもたらす効果」『老年看護学 21-1』 老年看護学会
- 寺嶋秀明 2009 「「今ここの集団」から「はるかな集団」まで：採集狩猟民のバンド」
 河合香吏編 2009 『集団：人類社会の進化』 京都大学学術出版会
- 戸沼幸市 1980 『人口尺度論』 彰国社
- ドイッチャー, ガイ 2012 『言語が違えば、世界も違ってみえるわけ』 インターシフト
- 中村 修 1995 『なぜ経済学は自然を無限ととらえたか』 日本経済評論社
- 中村雄二郎 1979 『共通感覚論』 岩波書店
- 西岡常一 1991 『木に学べ』 小学館
 1993 『木のいのち 木のこころ：天の巻』
- 西山志保 2002 「「サブシステムズ経済」の社会学的考察」『年報社会学論集』15号, 関東社会学会
- ノーバーク=ホッジ, ヘレナ 2018 『懐かしい未来 ラダックから学ぶ』 懐かしい未来の本
- 野村 進 2006 『千年、働いてきました：老舗企業大国ニッポン』 角川書店
 2014 『千年企業の大逆転』 文藝春秋社
- 野村雅一 1983 『しぐさの世界—身体表現の民族学—』 NHK ブックス
 1997 「「身体技法論」へのノート」 青木 保他 (編) 1997 『岩波講座人類学 3：「もの」の人間世界』 岩波書店。
- 浜田久美子 2002 『森がくれる心とからだ』 全国林業改良普及協会
 2008 『森の力』 岩波新書
- 濱田 陽 2005 「内なる環境、未知との共存」、山折哲雄 (編著) 『環境と文明』 NTT 出版。
- 日鷹一雅 2000 「農業生態系のエネルギー流の過去・現在・未来」、
 田中耕二 (編) 『講座人間と環境 3：自然と結ぶ』 昭和堂。
- ファーガソン, E. S. 1995 『技術屋の心眼』 平凡社
- 福岡伸一 2004 『もう牛を食べても安心か』 文春新書
 2009 『動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか』 木楽舎
- ブロディ, ヒュー 2003 『エデンの彼方』 草思社

- ホブズボウム, E/テレンス・レンジャー (編) 1992 『創られた伝統』 紀伊國屋書店
- ポランニー, マイケル 1980 『暗黙知の次元』 紀伊國屋書店
- 松本孝朗/小阪光男/菅谷潤壺 1999 「熱帯暑熱環境への適応」
『日本生気象学会雑誌』 36-2, 日本生気象学会
- 三嶋博之 2000 『エコロジカル・マインド』 NHK 出版
- 三俣 学 (編著) 2014 「多彩に広がるコモンズ論」
『エコロジーとコモンズ: 環境ガバナンスと地域自立の思想』 晃洋書房
- 宮崎良文 2003 『森林浴はなぜ体にいいか』 文藝春秋社
- 宮本常一 1984 『忘れられた日本人』 岩波書店
- 2011 『山に生きる人びと』 河出書房新社
- モース, M. 1976 『社会学と人類学 II (第6部 身体技法)』 弘文堂
- 養父志乃夫 2016 『里山里海』 勁草書房
- ユクスキュル, ヤーコブ・フォン 2005 『生物から見た世界』 岩波書店
- 吉本隆明 1968 『共同幻想論』 河出書房新社
- ルロワ=グーラン, A 2012 (1973 初訳) 『身ぶりと言葉』 筑摩書房
- 渡辺弘之 1989 『東南アジアの森林と暮らし』 人文書院
- 渡部重行 1980 「男性支配と女性の穢れ」 『社会人類学年報6』 弘文堂
- 1981 「神・精霊・死者 -バントゥ霊観念の構造的考察」 『民俗学研究』 46-1,
日本民族学会 (現 日本文化人類学会)
- 1995 『共生の文化人類学』 学陽書房
- 2003 『『循環型社会』の射程-地域の自立と市場経済』
『専修大学社会科学研究所月報 No.479』 専修大学社会科学研究所
- 2005 『『循環型社会』形成にかかる諸前提について』
『現文研』 81号、専修大学現代文化研究会

□海外文献□

- Daly, Herman E. 1996 *Beyond Growth: The Economics of Sustainable Development*. Boston: Beacon Press.
- (デイリー, H.E. 2005 『持続可能な発展の経済学』 みすず書房)
- Laundauer, K and Mark Brazil (eds) 1990
Tropical Home Gardens, United Nations Univedrsity Press: Tokyo, Japan
- Norberg-Hodge, Helena 2000 (1991)

Ancient Future: Learning from Ladakh (revised ed.), Rider Books: London

(ノーバーク=ホッジ, ヘレナ 2018 『懐かしい未来 ラダックから学ぶ』 懐かしい未来の本)

Mauss, Marcel 1950 (1936)

Sociologie et anthropologie, Presss Universitaires de France: Paris

(モース, M. 1976 『社会学と人類学 II』 弘文堂)

Mies, Maria and V. Bennholdt-Thomsen 1999

The Subsistence Perspective: Beyond the Globalised Economy, Zed Books: London.

Reed, E. S. 1996 *The Necessity of Experience*, Yale University Press: New Haven.

(リード, エドワード, S. 2010 『経験のための戦い: 情報の生態学から社会哲学へ』 新曜社.)

Van der Post, Laurens

1952 *Venture to the Interior*, Penguin Books

1958 *The Lost World of the Kalahari*, Penguin Books